

実りの秋に・・・

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」

(ヨハネの福音書 15 章 5 節)

私たちキリスト者にとって、求められていることは何でしょうか？もちろん、教会に連なり、礼拝を大切にしつつ、伝道や交わり、奉仕やみことばの学びに励むことは言うまでもありません。と同時に、そうすることによって、ただキリスト者であることを継続するだけでなく、私たち一人一人がキリストにつながって霊的に成長し、キリストに似た者として成熟することなのではないでしょうか？そして、それは言葉を変えれば、実を結ぶキリスト者になるということにほかなりません。

私たちキリスト者に結ぶことが期待されているのは「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」という“御霊の実”です。原語(ギリシア語)の文法からも分かることなのですが、これはあくまでも一人のキリスト者にその結実が求められる実のリストであり、選択肢ではありません。ぜひ、九つの結実を目指しましょう。

ところで、御茶の水キリストの教会の創立をリードした O. D. ビクスレー兄には、座右の銘がありました。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉です。これから秋が深まると同時に、稲穂もたわわに実り、その重みで穂先が垂れることになるかと思いますが、それと同じように、人は成熟すればするほど、むしろ謙虚になるということなのではないでしょうか？私たちもそうありたいと思います。御霊の実の結実を誇ることなく、むしろ、そうさせて下さる主をこそ誇り、主の如くへりくだりましょう。

## 使命の共有、使命の継承

「・・・あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」

(ルツ記1章16節)

上掲のみことばは、ルツが義母ナオミに対して語った言葉です。ある意味、異邦人ルツは神を敬うナオミの信仰姿勢に感化され、その信仰を共有し、その信仰を継承した、ということなのではないでしょうか？やがて、ルツは異邦人でありながら、ダビデの先祖に名を連ね、主イエス・キリストの系図にその名を残すことになるのです。

「六千人の命のビザ」で知られるクリスチャン外交官・杉原千畝。彼は人道的な立場から当時の日本政府の命令に反して、ユダヤ人救出のために、それはそれは大きな犠牲を払いつつ、独断でビザを発給しました。それによって、約六千人のユダヤ人がナチスの毒牙を免れ、生き延びることになったのです。ちなみに、そのユダヤ人たちの子孫は現在、イスラエルなどに数万人規模でいらっしゃるそうです。

ところで、杉原千畝のユダヤ人救出計画は、実は、必ずしも彼一人の力だけで達成された訳ではなかったのです。比較的最近、私は、そんな杉原千畝の素晴らしい働きの後日談、その「続き」を知る機会がありました。あの偉業の陰には、その使命に共鳴し、その意思を受け継いで、その働きを支え、完成させた人たちがいたのです。

リトアニアを出たユダヤ人は、ロシアはウラジオストクで窮地に陥りました。日本政府がその後の入国に対して、そのビザの正当性を問題視したのです。しかし、その際、在ウラジオストク総領事代理だった根井三郎がもう一人の杉原千畝になったのです。その後、根井からバトンを受け継いだ JTB 職員の大迫辰雄の配慮、行き着いた敦賀での敦賀市民たちの好意、そして、ユダヤ学者・小辻節三の尽力があったのでした。

## 最高のスカウト

「イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、『わたしについて来なさい。』と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った。」（マタイの福音書9章9節）

上掲の聖書箇所は、『マタイの福音書』に記されたマタイ自身の召命の場面です。わずか一節、さらっと書いてありますが、ここには、様々な可能性を読み出すこともできるのではないのでしょうか？

「収税所にすわっているマタイ」という表現一つとっても、様々なメッセージが伝わってきます。まず、「収税所」から分かりますように、マタイ自身がユダヤ社会では蔑まれていた取税人でした。そして、そこに「すわっている」というのは、“働いている”とは真逆の表現で、茫然自失でただボーっとしているかのようです。さらに、マタイはそんな過去の自分を包み隠さず書いていますが、他の共観福音書記者のマルコとルカは、遠慮してその実名を隠したのか、「レビ」という別名を使っているのです。

そんなマタイを主イエスが「ご覧になって」目を留め、「わたしについて来なさい」とその弟子へと召し出しました。まさに、主イエス・キリストこそ、最高のスカウトなのではないのでしょうか？マタイの活躍は顕著です。彼はその後、主イエス・キリストの側近、いわゆる十二弟子の一人になり、何よりも、神の靈感を受けて、主イエス・キリストの生涯、その言動を綴った『マタイの福音書』を書き上げたのです。

ちなみに、マルコとルカの別名「レビ」に対して、マタイ自身がその福音書で敢えて実名「マタイ」を使っているのは、まさにこのマタイは主によって変えられ、信仰が引き出され、こうなったのだということを証しするためなのではないのでしょうか？

<請求書>の信仰から<領収書>の信仰へ

「弟が父に、『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。」  
(ルカの福音書 15 章 12 節)

私たちはともすると、あの放蕩息子のように、真の父親である神様に、とてつもない請求を突き付けているのではないのでしょうか？・・・あれして欲しい、これして欲しい、と。しかしながら、そんな真の父親である神様は、私たちにその一人子イエス・キリストをも差し出すほどの大盤振る舞いをして下さっているのです。そのことを、私たちはどれほど弃えているのでしょうか？

最近、私の母が FAX で「母の請求書」なるエピソードを送ってくれました。興味深いので分かち合いたいと思います。以下のような内容でした。

・・・お手伝いを頼むと、息子はその都度、必ず「お駄賃ちょうだい」とせがんで来るといふ。そこで、ある日、そんな息子に母親はこう言った。「生まれてからずっとお乳を上げた代金 0 円。何度もおむつを交換した代金 0 円。毎日、ご飯やお弁当を作ってあげた代金 0 円。病気の時に来る日も来る日も看病した代金 0 円。あなたのためにしたこと全部 0 円。以上。」。

この後の顛末は書いてありませんでしたが、おそらく、この息子はそれ以降、無償でお母さんのお手伝いをしたのではないのでしょうか？言うなれば、<請求書>の生き方から<領収書>の生き方へと変えられたのではないかと希望的に推察します。

まず、恵みありき！・・・私たちも、神様のとてつもない代償を伴う救いの恵み、私たちにとっては無償の恵みを覚えて、ただ自分中心の<請求書>の信仰にのみ生きるのではなく、時に、<領収書>の信仰を発揮する者になりたいと思います。

## 良い知らせを伝える者の“足”

「『主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる』のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。『良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。』」

(ローマ人への手紙 10 章 13～15 節)

本来ですと、先々週の日曜日(8/9)が、東京オリンピック 2020 の最終日であり、札幌で最終種目の男子マラソンが行なわれる予定でした。マラソンと言えば、オリンピックの花形競技の一つであり、それゆえに、トリを飾るのではないのでしょうか？

そんなマラソンの起源は、紀元前 5 世紀のいわゆるペルシア戦争の際のマラトンの戦いにおいて、アケメネス朝ペルシアの攻撃を撃退し、勝利したアテネ・プラタイア連合軍の伝令エウクレスが、マラトン～アテネ間の約 40km を走って、勝利の“良い知らせ”を伝え、息絶えたという故事に基づいております。おそらくエウクレスは、勝利の“良い知らせ”を、是が非でも同胞たちに伝えたかったのではないのでしょうか？

ところで、パウロは、イザヤ書 52 章 7 節を引用して上掲のみことばを書いているのですが、おそらくその背景に、マラトンの戦いにおける伝令エウクレスのような良い知らせ、すなわち「福音」を伝える者の役割を想定しているものと思われます。

注目すべきは、ここで、福音を伝える者の“足”に焦点が当てられている事実です。話術(口)や知識(頭)ではなく、その福音を伝えるということ自体が立派であり、美しいということなのではないのでしょうか？福音は、伝えられて初めて“福音”なのです！

## 向くべき方向を向く

「しかし、人が主に向くなら、そのおおいを取り除かれるのです。・・・私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられて行きます。・・・」

(コリント人への手紙第二 3 章 16、18 節)

我が家の庭には、子供たちが植え、家内が手入れをし、神様が育てて下さっている(つまり、私は何も手をかけていない)花々が咲いています。今年の夏は、例年になく見事に、向日葵(ひまわり)が咲いているのに気付きました。ただ、残念なことに、そんな向日葵たちですが、我が家から見れば、そっぽを向く形で、家の外側を向いて咲き誇っているのです。もちろん、「向日葵」という名の如く、太陽の方向を向いて咲いている訳です。ある意味、向くべき方向を向いている、ということではないでしょうか？

願わくば、私たちキリスト者も、日々、向くべき方向、すなわち、主の方向を向いて、置かれた場所で咲きたいものです。そうします時に、上掲のみことばにありますように、私たちキリスト者は主の御姿を鏡のように映し出し、それを反映させながら、主と同じ姿に変えられていく可能性が出て来るのではないのでしょうか？

あの湖上歩行を試みたペテロ(ルカ 14:22～33)は、当初、主の方向を向きつつ、数歩、歩くことができたのですが、「風を見て、こわくなり、沈みかけた」のでした。つまり、主から目を離れた途端に沈み始めたということではないのでしょうか？

ある意味、今、私たちの行く手には、コロナ禍という“風”、しかも、かなりの強風が吹いております。恐ろしさの余り、つい目を奪われがちですが、こういう時だからこそ、しっかりと向くべき方向、すなわち、主の方向をこそ向きたいと思えます！

## “たといそうでなくても”の信仰

「しかし、もし、そうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拜むこともしません。」

(ダニエル書3章18節)

自分の願い通りになったら神を信じる。往々にして、人はそう考えがちではないでしょうか？ただ、それが行き過ぎて、常態化しますと、そのような信仰を“ご利益信仰”と呼ぶことがあります。

厳密に言えば、キリスト教信仰の本質は「まず恵みありき」で、最初に神の恵みや救いがある、それらへの応答として、私たちの信仰が発出する、ということなのだと思います。このことはある意味、究極の救いの恵みの中にある者として、私たちは、普段の生活の中のご利益から基本的には解放されているということでもあるのではないのでしょうか？

そのことを端的にイメージさせるのが、上掲のみことばを中心とするシヤデラク、メシヤク、アベデ・ネゴの“たといそうでなくても”の信仰ではないでしょうか？・・・彼らはバビロンでネブカデネザル王に偶像礼拝を強要され、それを拒むなら燃える炉に投げ込まれると宣告されます。しかしながら、彼らは決然と「私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます」(17節)と言い、上掲のみことばを語るのです。ちなみに、冒頭の「もし、そうでなくても」は、古い訳(口語訳聖書)では「たといそうでなくとも」となっています。

恵みを知っている私たちに求められるのは、まさに、そんな“たといそうでなくても”の信仰なのではないのでしょうか？なお、機会がありましたならば、ぜひ、信仰書の名著の一つ、安李淑著『たといそうでなくとも』(待晨社)[1972年]をお読み下さい。

## 神の愛の賞味期限

『きょう。』と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。もし最初の確信を終わりにまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。『きょう、もし御声を聞くなれば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにはならない。』と言われているからです。」

(へブル人への手紙3章13～15節)

以前、“みことばの賞味期限”ということを書いたことがあります。荒野の四十年において、イスラエルの民は、主なる神が備えて下さった天からのパンであるマナを毎日、集めては食べました。そんなマナは賞味期限、正確には消費期限はたった“一日”でした。安息日前を別にして、それは翌日には腐ってしまい、持ち越せなかったのです。ある意味、みことばもその日、その日にいただく分がありますので、食い溜めをするのではなく、まさに、“今日の力”として、日々、必要で新鮮なみことばをいただきたいものです。

最近、「神の愛は今日限り」という奨励を伺いました。ある意味、神の愛もその日、その日にしっかりといただくべき分があるということなのではないでしょうか？ことに、この新型コロナウイルスという未知の問題がある中、私たちは先のことはよく分かりません。それゆえ、一日、一日を大切に、その日その日に注がれている神の愛をしっかりと受け留めて吸収し、じっくりと味わいたいものです。

神の愛の賞味期限？・・・もちろん、それは永遠であり、無限・無期限です！しかしながら、それを受ける私たちのこの地上生涯、人生には、それなりの期限、限りがあるのではないのでしょうか？・・・だからこそ、今日、神の愛を受け止めるのです！



## 経年美化

「ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」

(コリント人への手紙第二 4 章 16 節)

つい先日、車を運転していて、ある交差点に差し掛かった時、お年を召した方が横断歩道をそれはそれはゆっくりと渡っておられました。正直、私は若干、先を急いでいましたので、「もう少し早く渡って欲しいな」と思いつつ、その男性の顔をまじまじと見てみたのです。すると、なんと・・・その男性、私の同級生ではないですか！自分自身が年を取ったことを実感した瞬間です。

そう言えば、最近、とみに老眼が進み、うっかりミスが増えてきたように思います。これからますます老いていくのかと思うと、気も滅入ります。しかしながら、最近、私がよく観ている『お宝鑑定団』（という TV 番組）で、ある素晴らしい言葉と出会いました。それは「経年劣化」ではなく、「経年美化」という言葉です。

あるペルシャ絨毯の鑑定で思わぬ高額を叩き出した、そのお宝の絨毯を「大事に仕舞っておきます」と言った持ち主に対して、絨毯鑑定者は「いやいやいや、むしろ、使って下さい。ペルシャ絨毯は使えば使うほど深みが出、味わいや価値が増すんです。」と言って、「経年美化」という言葉を使ったのです。

「経年美化」・・・いい言葉ですね～。私たちキリスト者も、まさに、「外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされて」、霊的に“経年美化”させていただきましょう。そうして、やがて、「しみや、しわや、そのようなものの何一つない」（エペソ 5:27）栄光の身体にさせていただくまで、私たちは<神の作品>として、自分の使命を果たして参りましょう。神様はきっと天国で言っています、「いい仕事してますね～」。

## 真の美しさ

「おとめたちは、夫人の規則に従って、十二か月の期間が終わって後、ひとりずつ順番にアハシュエロス王のところに、はいつて行くことになっていた。これは、準備の期間が、六か月は没薬の油で、次の六か月は香料と婦人の化粧に必要な品々で化粧することで終わることになっていたからである。」  
(エステル記2章12節)

「しかし主はサムエルに仰せられた。『彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。』」  
(サムエル記第一16章7節)

随分前の話になりますが、「男性19分、女性27分」と言われたことがあります。これはすなわち、朝、鏡の前に立つ平均時間です。今から30年以上前のデータですので、おそらく時間は倍増しているのではないのでしょうか？それはさておき、人前に出るためには、それなりに身だしなみ、お化粧も必要でしょう。

ちなみに、「美容」を意味する“エステ”という言葉、実はペルシャ王妃として王の寵愛を受けるべく美容のために上記一つ目の聖句のように入念なお手入れをしていた“エステル”が語源なのです。もっともエステルは、化粧や美容を駆使して表面上の美しさを際立たせただけでなく、内面の美しさも兼ね備えていたことは言うまでもありません。彼女の為したことがそれを如実に物語っているのではないのでしょうか？

私たちの神様は、上記二つ目の聖句の如くに、私たちの外見ではなく、むしろ、その内面の美しさにこそ目を留めて下さるのです。それゆえ、私たちは、できることならば、毎朝、鏡の前に立つ以上に、聖書(という心の鏡)の前に座りたいと思います。

## 帰るべきところがあるという恵み

「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」

(へブル人への手紙 11 章 13 節)

聖書は、上掲のみことばをはじめとして、そもそも地上生涯、人生そのものが旅なのだと言います。そして、トラベルにはトラブル。そんな人生という旅にはハプニングが付き物です。大変なこともあれば、思わぬ絶景の発見や予期せぬ出会いもあるのではないのでしょうか？旅ならではの醍醐味です。

ところで、普通、旅が終わったら、自宅の家(ホーム)へ帰ります。そして、皆一様に言うのではないのでしょうか？「ああ、やっぱり家(うち)が一番いい～」と。「終着駅は始発駅」という言葉もありますが、ほぼ毎日、私たちは仕事や外出を終えて、家(ホーム)に戻り、そこで英気を養って、また翌朝、家(ホーム)から出て行くのです。・・・帰るべきところがあるというのは、本当に“恵み”なのではないでしょうか？

私たち地上の旅人、信仰者にとって、究極の帰るべきところ、家(ホーム)とは一体、どこでしょうか？・・・それは言うまでもなく、“天の御国”にほかなりません。そして、そんな天の御国では、究極のお父さんが、私たちの帰りを、それはそれは首を長くして、待っていて下さるのです。そんなことを覚えながら、トラブルあるトラベル、大変かもしれない人生という旅路を全うしたいと思います。

こんな言葉があります。「良い港があるからこそ、人は冒険的な航海に出ることができる」。今、新型コロナ・ウイルス問題という未知の世界を旅している私たちですが、究極の帰るべきところがあり、究極の道連れがいることを忘れませんように！

命は“守る”ものではなく、“使う”もの

「・・・もしキリストにあって励ましがああり、愛の慰めがああり、御霊の交わりがああり、愛情とあわれみがああるなら・・・自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」

(ビリピ人への手紙2章1、4～5節) [⇒I コリ 10:24]

新型コロナウイルスの感染拡大という地球規模の脅威に私たちはそれぞれ自分の命を守ることに精一杯です。もちろん、他者への感染ということを考えます時、自分の命は他者の命にも繋がっていますので、それを守るということも大切なことでしょう。

ただ、自分の命を守ろうとするが為に他者の命をないがしろにするとしたら、いかがなものでしょうか？少なくとも、聖書は私たちに“自分ファースト”ではなく、その対極の、言うなれば、“他人ファースト”とでも呼べるような生き方を勧めています。

私たち人間は誰も、弱さ、聖書で言うところの“罪”を持っていますので、「自分さえ良ければ」という“自分ファースト”の傾向は、ある意味、当たり前のようにあります。ただ、みんながみんな“自分ファースト”だったら、大変なことになってしまうのではないのでしょうか？あまりいい例ではないかもしれませんが、考えてみて下さい。もし、あなたが赤ちゃんだった頃、誰がオムツを交換し、誰が食事の世話をしてくれたのでしょうか？・・・親はある意味、自分の命を使って子供を育てることを使命としているのです。主もその命を使って、私たちを救って下さったのです！

上掲のみことばにおいて、パウロは言います。「もしキリストにあって励ましがああり、愛の慰めがああるなら～自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。ある意味、“自分ファースト”になりがちな私たちへのチャレンジではないのでしょうか？

## 恵みの雨、希望の曇り

「悲しみは笑いにまさる。顔の曇りによって心は良くなる。」

(伝道者の書7章3節)

いよいよ関東地方も梅雨入りが宣言されました。これからは雨や曇りの日も多くなることでしょう。新型コロナウイルスの問題に加えて、天候のことも考慮しなければなりません。そんなことを考えますと、つい悲しくなり、顔も曇りがちになってしまうのではないのでしょうか？しかし、聖書はそんな私たちにこう語り掛けています。「悲しみは笑いにまさる。顔の曇りによって心は良くなる。」(上掲のみことば↑)と。

ある方は言いました。「涙を流したり、悲しむこと以上に悲慘なことは何か？それは、涙を流すことができず、悲しむことさえできないことである。」。確かに、そういう面があるのではないのでしょうか？ある意味、共に悲しんで下さるお方の前で思いっきり涙を流したり、顔を曇らせることができるのは、幸いなことなのかもしれません。つまり、共に涙を流して下さる主の前で分かち合う悲しみは人の前での笑いにまさり、全てを理解して下さっている神様の前で顔を曇らせることは私たちの心の解放や心の回復につながっていくのではないのでしょうか？

“April shower brings May flowers.”（「雨の季節が花々の季節をもたらす！」）・・・転じて「試練が後の祝福を運んで来る」。そして、最近、こんな言葉も教えていただきました。“Every cloud has a silver lining.”（「どんな暗雲にも[太陽の存在をほのめかす]銀色の縁どりがある！」）。・・・すなわち、失望や落胆の向こうに希望の光がある、ということではないでしょうか？

これからの梅雨の季節とウィズ・コロナの時節、雨を“恵みの雨”として、曇りを“希望の曇り”として受け止めて参りましょう。アーメン(雨)、ハレルヤ(晴)！

## 諸刃の剣としての言葉

「…舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。ご覧なさい。あのように小さい火があのような大きい森を燃やします。舌は火であり、不義の世界です。…」  
(ヤコブの手紙 3 章 5～6 節)

「親切なことばは蜂蜜、たましいに甘く、骨を健やかにする。」

(箴言 16 章 24 節)

上掲一つ目のみことばにおいて、ヤコブは、舌は大きな森を焼き尽くしかねない危険な火のような存在だと言います。先頃、報道されたオーストラリアの森林火災の凄まじさを見れば、その恐ろしさが分かるでしょう。私も個人的に、家が全焼した経験がありますので、火の恐ろしさ、身に染みて感じています。そんな火のように、私たちの舌、すなわち、私たちが発する言葉は人を傷つけたり、世の中を混乱に陥れたりする可能性があるということではないでしょうか？まさに、「口は災いのもと」です。ゆえに、それを管理することが私たちには求められているのです。

パウロはコロサイ人への手紙 4 章 6 節で、「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい」と言っています。それは決して、ピリッと塩辛く、何でもはっきり言うということではありません。むしろ、塩でもまれた一夜漬の野菜のように、熟成されて角が取れ、まろやかな味わいになる言葉ということではないでしょうか？まさに、上掲二つ目のみことばである箴言の言葉にある通りです。コロナ禍で世の中が疲弊している今、そういう言葉が必要とされているのです。

言葉はある意味、“諸刃の剣”です。“火”にもなれば、“蜂蜜”にもなります。私たちの言葉を決して“火”にしないために、人となられた言(ことば[ロゴス])としての主イエス・キリストが発した愛のことばをしっかりと受け止めたいものです！

時が来れば・・・

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」  
(使徒の働き 1章8節)

いわゆる教会暦では、先週の日曜日(5/31)が、今年のペンテコステ、すなわち、聖霊降臨日に当たりました。本来のペンテコステとは、その時を待っていた弟子たちに聖霊が降り、教会が誕生した瞬間であり、「教会の誕生日」とも言われます。

ところで、私たちは今、新型コロナウイルス問題に伴う外出自粛の中で、5/24付の週報「一ロレッシン」にも書きましたように、外出自粛ゆえに自分自身の在り方を見詰め直さざるを得ない“Be(静止)の時”を過ごしています。しかしながら、伝道者の書3章1節以下にありますように、「すべて(の営み)には時があ」ります。外出自粛が終わる時があり、また、心置きなく外へと出て行ける時、“Goの時”も必ずやって来るのではないのでしょうか？

二千年前の弟子たちは、ペンテコステの前、ある意味、不安と希望の入り混じった中で、その時を待っていました。主イエスの「エルサレムを離れないうで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい」(使徒 1:4)との言葉を信じて・・・。そして、ついに、その時、ペンテコステにおける聖霊降臨の“時”、教会誕生の“時”は来たのです。

ぜひ、私たちも、「待つ」信仰を発揮して、神の時を待ちたいと思います。自分のタイミング(Good Timing)ではなく、神のタイミング(God's Timing)を見据えながら。

詩篇(1:3)にはこうあります。「時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」。神の時([ギ]カイロス)をこそ、待ち望みましょう！

外出自粛から生まれるもの

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」  
(ローマ人への手紙 8 章 28 節)

今回の新型コロナウイルス問題は、多くの予定や計画を中止や延期へと追い込みました。東京オリンピックの一年延期のみならず、最近では、あの夏の甲子園も中止を余儀なくされ、現在の高校三年生は春のセンバツと併せて、大きな目標を失ってしまったのではないのでしょうか？

私たちの(それなりに長い)人生という旅路には、思いも寄らぬハプニングは付き物です。トラベルにはトラブルといったところでしょうか？ただ、そんな人生の旅における途中下車や回り道、雨宿りや一休みには、予想もしなかった発見や予期せぬ出会いがあるのも事実です。もしかしたら、皆さんの中にも、今回のコロナ禍において、そんな“万事が益となる”ような体験をした方も少なくないのではないのでしょうか？

ところで、5月22日の朝日新聞「天声人語」欄に、こんな話が出ておりました。すなわち、かの有名なニュートンの万有引力の法則は、自粛生活の中から生まれたというのです。英国で、いわゆるペストが猛威を振るった17世紀、若きアイザック・ニュートンは大都市ロンドンを離れ、郷里の村へ避難し、自粛生活を強いられました。そんな自粛生活は一年半に及びますが、そんな中、ニュートンは、なんと、あの万有引力の法則をはじめ、微積分や光学の分野での大きな発見をしたというのです。

主にあって万事は益となることを覚えて、人生という旅路の途中下車や回り道、雨宿りや小休止にこそ隠されている神の恵みという宝物を発掘させていただきましょう。



## “Be”の時から“Go”の時へ

「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

(マタイの福音書 28 章 19～20 節)

かつて、ジャーナリストの田原総一郎氏は、戦後を三つの時代に区分しました。すなわち、マイカー、マイホーム希求の高度成長期を“Have”（所有）の時代、それにつづく、レジャーや株売買などに興じた、いわゆるバブル期を“Do(行動)の時代”、そして、その後のバブル崩壊後を、一旦立ち止まって自らの存在を見詰め直すという意味で“Be(静止)の時代”と呼びました。

私もかつて、そのような区分を教会にも当てはめて、戦後のキリスト教ブームで会堂や一人でも多く教会員を増やそうとした“Have”（所有）の時代、その後のいわゆる「教会成長」を追い求め、様々なことを試した“Do(行動)の時代”、そして、現在、まさに、少子高齢化など様々な要因によって“Have(所有)”も“Do(行動)”も難しくなった“Be(静止)の時代”を教会は迎えている、と述べたことがあります。

しかしながら、それで終わった訳ではありません。教会はある意味、人間の集まりですが、そこに主なる神様の力が働くのであり、働いているのです。ゆえに、主を待ち望む者たちには、やがて、“Go(宣教)”の時代が来るのではないのでしょうか？ どのような形でそれが来るかは分かりませんが、そんな“Go(宣教)の時代”到来に向けて、私たちはできることをしつつ、備えて参りたいと思います。

より短いスパンで言えば、今回のコロナ禍で、教会はある意味、“Be(静止)”の時を強いられました。しかし、まもなく“Go(宣教)”の時が来ます。さあ、備えましょう！

## 霊的距離 (スピリチュアル・ディスタンス)

「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」

(ビリピ人への手紙2章4節)

新型コロナウイルスの問題に関して、頻繁に言われているキーワードがあります。「テレワーク」、「三つの密」、「ステイホーム」、「外出自粛」などなど。問題が収束した後、おそらく今年の流行語(大賞)になり得るものばかりではないでしょうか？

そんなキーワードの一つに「ソーシャル・ディスタンス」があります。訳して「社会的距離」。他者(ひと)との距離を2メートル程度確保することが奨励されています。

「和をもって尊しとなす」島国であり、人口密度の高い日本では、なかなか難しいことではないでしょうか？しかしながら、感染拡大を阻止するためには止むを得ません。なんとか距離を取り、外出を控えて他者(ひと)との接触を抑えたいと思います。

ところで、人間(にんげん)とは、人間(じんかん)と書き、人と人との間で生きていく存在であることを表わします。必要以上に他者(ひと)と距離を取るのが難しいばかりか、むしろ、いい意味での人(ひと)との接触=交わりがないと、霊的・精神的に人は落ち込んでしまうものなのではないでしょうか？そのような意味において、ソーシャル・ディスタンス(社会的距離)は確保しつつ、言うなれば、スピリチュアル・ディスタンス(霊的距離)は極力、縮めていくことが求められるのではないかと思います。

祈りというテレワーク、電話でお交わりをするなどのテレ(フォン)ワークなどを駆使して、神様や兄弟姉妹とのスピリチュアル・ディスタンス(霊的距離)を縮めましょう。・・・こんな言葉があります、「わずか数メートルの距離であっても、互いに反対方向を向いていたら、そこには永遠の距離がある。その一方で、どんなに離れていたとしても、お互いに向き合ってさえいれば、やがてその距離は確実に縮まる。」

朝の来ない夜はない！

「主よ。いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで御顔を私からお隠しになるのですか。」(詩篇13篇1節)

「夕べがあり、朝があった。」(創世記1章5節、他)

新型コロナウイルス感染防止のために、いわゆる「緊急事態宣言」の期間が一ヶ月程度延長されました。一刻も早い問題の収束を願う一方、この自粛生活がいつまで続くのか、という先の見えない不安に苛まれている方も少なくないのではないのでしょうか？今や新型コロナウイルスは、感染するか否かの問題に留まらずに、他の病気に対する医療不足、職種によっては深刻な経済的なダメージ、さらには、心の問題(メンタルヘルス)にも大きな影を落としています。まさに、今、世の中は、地球規模の“夜”の闇の中にあるようです。

しかしながら、私たちの拠り所とする神のみことばである『聖書』は、その開巻冒頭から「夕べがあり、朝があった」と、「朝の来ない夜はない」(吉川英治)ことを、「明けない朝はない」(シェークスピア)ことを如実に物語っております。

さらに言えば、イエス・キリストの十字架と“復活”に基づくキリスト教信仰は、悲しみの夜があっても必ず希望の朝(あした)が来ることを私たちに明確に指し示しているのではないのでしょうか？

クリスチャン作家の三浦綾子さんはかく言いました。「トンネルは抜けるためにこそある」。まさに今、私たちは新型コロナウイルス問題という試練のトンネルの中におります。しかしながら、トンネルはその暗闇の中で絶望するためにあるのではなく、それを抜け、新たな世界に出て行くためにこそあることを今、覚えたいと思います。

靈的思考に気をつけなさい！

「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。」

(箴言 4 章 23 節)

ある認知心理学者が言っております。「ヒトは自分の見たいものしか見(え)ない」と。確かに、そういう傾向があるのではないのでしょうか？私たちはつい色眼鏡をかけて、すなわち、先入観や偏見で物事を見てしまいがちです。そして、そういう先入観や偏見を完全に払拭するのは不可能に近いでしょう。

では一体、どうしたらいいのでしょうか？一つの可能性といたしましては、私たちの心、その思考を清く保つと申しますか、いい状態にしておくことが必要なのではないかと思います。ある意味、今現在の外出自粛は誠に辛いものがありますが、むしろ、この機会をこそ、日々、聖書のみことばに養われつつ、その靈的な思考を磨く時としてはいかがでしょうか？

かのマザー・テレサに帰される言葉の中に、以下のような言葉があります。ご存知の方も少なくないのではないのでしょうか？

「思考に気をつけなさい」

思考に気をつけなさい。それはいつか言葉になるから。  
言葉に気をつけなさい。それはいつか行動になるから。  
行動に気をつけなさい。それはいつか習慣になるから。  
習慣に気をつけなさい。それはいつか性格になるから。  
性格に気をつけなさい。それはいつか運命になるから。

## 応えられた祈り、変えられた私

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

(コリント人への手紙第二 3 章 18 節)

何度か紹介している詩に「応えられた祈り(Answered Prayer)」という作者不詳の詩があります。・・・「功績を立てようと、神に力を祈り求めたのに、謙虚に服従するようにと、弱さを与えられた。より大きなことをしようと、健康を祈り求めたのに、より良いことをするようにと、病気を与えられた。幸福になるようにと、富を祈り求めたのに、賢くなるようにと、貧しさを与えられた。人々の賞賛を得ようと、権力を祈り求めたのに、神の必要を感じるようにと、弱さを与えられた。人生を楽しもうと、あらゆるものを祈り求めたのに、あらゆるものを楽しむようにと、人生を与えられた。祈り求めたものは何ひとつ与えられなかったのに、実は私が望んでいたすべてのものが与えられた。このような私にもかかわらず、私の言葉にならない祈りは応えられ、すべての人にまさって、私は最も豊かな祝福を与えられた。」

この詩を通して教えられることは、祈りが応えられるということは、必ずしも自分の思い通りに願い事が叶うことではない、ということなのではないでしょうか？少なくとも私は、今から約三十年前の米国留学時代に出会ったこの詩をそのように理解して参りました。しかしながら、この度、改めてこの詩を読み直しました時に、もう一点、この詩は大切なことを私たちに語りかけているように思ったのです。それは、私たちは祈り(というプロセス)の中で変えられる！ということです。確かに、主イエス・キリストもあのゲッセマネの祈りの中で、あのヤコブもヤボクの渡しにおける神の人との格闘(すなわち、霊的には決死の祈り)の中で、変えられたのではないのでしょうか？

数えてみよ、主の恵み ～今こそ、靈的な宝探しを！～

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」  
(詩篇 103 篇 2 節)

最近、読みました小説の中に、海岸で金属探知機を使って宝探しをするという場面が出て来ました。その場面を想像しているさ中、私は思い出したのです。アメリカ留学時代、クワイト・イーストマンという大学院の同級生が、暇さえあれば、寮のあるキャンパスの至る所を金属探知機で宝探ししていたことを。「ヨシヤ、こんな昔の貴重なコインが出て来たよ!」、彼は嬉しそうにまくしたてました。何の変哲もないキャンパスの土の下に、まさに、宝物が埋もれていたのです。

今、私たちは、新型コロナウイルスという、先の見えない問題に自宅待機を求められ、悶々としています。ある意味、普段のありふれた普通の生活がいかに恵まれていたかを、思い知らされているのではないのでしょうか?

ぜひ、この機会に、普段の普通の生活に、いや、今現在の制限された生活の中にも、埋もれているかもしれない宝探し、恵み探しをさせていただけようではありませんか? さらに言えば、ある意味、先に進めない、こういう時だからこそ、後ろを向いて、今までに自らに注がれていた恵みを再発見し、為すべき感謝と讃美を主なる神様におささげしようではありませんか?

望みも消えゆくまでに	世の嵐に悩む時
数えてみよ主の恵み	汝が心は安きを得ん
数えよ主の恵み	数えよ主の恵み
数えよ一つずつ	数えてみよ主の恵み

(聖歌 604 番)

このような時だからこそ、復活の希望を！

～ こんな美しい朝に～

「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」  
(コリント人への手紙第一 15 章 20 節)

絶望の夜があっても、やがて必ず希望の朝が来る！・・・人類最大の敵とも言うべき死を打ち破ってよみがえられた主イエス・キリストの“復活”は、まさに、そのことを如実に物語り、明確に指し示しているのではないでしょうか？

「人は思い描いたような人になる」と、よく言われます。確かに、私たちは、多くの場合、思い描いたように生きることになるのではないのでしょうか？ 良いプラスのイメージを思い浮かべれば、そのように前向き肯定的に生きることになり、逆に、悪いマイナスのイメージを思い浮かべれば、後ろ向き否定的になってしまうものです。

今、現在、日本でも“非常事態”が宣言されていますように、新型コロナウイルスの感染拡大は地球規模の脅威になっています。テレビのニュースや情報番組は連日、非常に厳しい状況を報道しています。もちろん、本当に大変な現実がありますので、私たちは緊張感をもって、最大限の注意を払うべきことは言うまでもありません。

ただ、それと同時に、キリストの十字架の死にはキリストの復活が続きましたように、この問題にもやがて“脱出の道”が与えられ、問題を乗り越える時が来ることを、私たちは、信仰と祈りのうちに思い描きたいと思います。

ちなみに、私は今、アカペラ讚美グループ“ヴォーチ・セラフィム”の姉が度々讚美して下さいます、水野源三氏原作、川口耕平氏作曲のこの讚美歌を何度も何度も口ずさんでおります。♪こんな美しい朝に、主は、主は、よみがえられた～♪

「わたしは、よみがえりです。…わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネ 11:25)

## 十字架・・・神の痛みという恵み

「すべての人は、罪を犯したので、神からの榮譽を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」  
(ローマ人への手紙 3 章 23～24 節)

今、私たち人類は、まさに世界中で、新型コロナウイルスという地球規模の危機に直面し、大いに苦しんでいます。一刻も早い収束を祈るばかりです。この感染症で大切な家族を亡くされた方々には主の深い慰めが、闘病中の方々には主の速やかな癒しが、そして、不安を感じている方々には主の豊かな平安がありますように！

ところで、いわゆる教会暦では、来週の日曜日(4/12)の復活祭(イースター)に先立って、今週(4/5～)は主の御苦しみを覚える「受難週」にあたります。そんな主の受難のクライマックスが主イエス・キリストの十字架に他なりません。当然のことながら、主イエスご自身の御苦しみにには私たちの想像を絶するものがあり、また、そんな愛する御子の苦しみを見守られた父なる神の心痛はいかばかりであったでしょうか？

讚美歌第二編 185 番の折り返しは、こう歌われます。「十字架、十字架、主イエスの十字架、わがためなり」。・・・なぜ、主イエスの十字架は「わがため」なのでしょう？それは十字架こそが唯一の救いの手段であるからです。

讚美歌 262 番の 1 節は、こう歌い始めます。「十字架のもとぞ、いとやすけき。神の義と愛のあえるところ」。神の御子イエスの十字架上の贖いの死こそ、神の義と神の愛という、一見、相矛盾する神の二つのご性質を調和的に満足させるものなのです。御子の死によって裁きの神は黙し、その身代わりによって愛の神は微笑みました。

そんな主イエスの十字架は、主にとっては大いなる苦しみであり、神にとっては深い痛みである一方、私たちにとっては、まさに“これしかない”救いの恵みなのです！



## テレ・ワークとしての祈り

「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。」  
(詩篇 121 篇 1~4 節)

今、世界は、地球規模の脅威としての新型コロナウイルスの問題で危機に瀕しています。そんな中、感染を避けるために、自宅で仕事をする“テレ・ワーク”が取り沙汰されております。ただ、テレ・ワークが可能な職種とそうでない職種があるのも事実です。(ちなみに、“テレ”とは、元来「離れた場所」で」という意味です。)

幸いなことに、私たちキリスト者の最善・最大の営みとしての祈りは、いわゆる“テレ・ワーク”が可能なのではないのでしょうか？もちろん、教会堂で共に祈ることも素晴らしいことですが、それだけでなく、たとえ場所は離れていても、それぞれが置かれた場所で、共に同じ唯一の神様に祈ることができるのです。そして、神様は、どんな場所からでの祈りにも耳を傾けて下さいます。

ぜひ、外出が難しい今だからこそ、私たちキリスト者は、そんなテレ・ワークとしての祈りに励もうではありませんか？一刻も早い新型コロナウイルス感染拡大の収束のために、この病気ゆえに親しい家族や友を亡くされた方々への深い慰め、今、この病気と闘っている患者さんたちの速やかな回復、そして、この問題ゆえに大いなる不安を抱えている方々の豊かな平安のために、祈ろうではありませんか？

ところで、一つ提案したいと思います。“テレ・ワーク”の“テレ”は、“レフォン(電話)”の“テレ”でもありますので、この際、電話など(含・ビデオ通話)を使って、兄弟姉妹に連絡し、共に祈り合い、また、主にある交わりをしてはいかがでしょうか？

主にあって、置かれた場所で・・・花は咲き、実なる！

「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」  
(箴言 3 章 6 節)

春は別れの季節であり、出会いの季節です。また、自分の身の置き場(=環境)が大きく変わる時でもあるのではないのでしょうか？新しい環境には、淡い希望もあれば、漠然とした不安もあることでしょう。

聖書は、そんな私たちに、こうアドバイスしてくれています。「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。」と。私たちは、どのような環境にあっても、主なる神を見上げることができるのではないのでしょうか？そして、そんな主なる神をこそ、惑い揺れる私たちの確固とした座標軸にすることができるのです。「そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」とある通りです。

仮に、慣れ親しんだ母教会を離れて未知の地に行くとしても、そこで、どこかの教会に属して礼拝しつつ、同じ主なる神を見上げたいものです。また、たとえ、新型コロナウイルス問題ゆえに、共に礼拝できなかつたとしても、各自、各ご家庭でみことばを頂きつつ、同じ主なる神に祈り、讚美したいものです。

今年は、新型コロナウイルスの地球規模の大嵐が吹き荒れる中、東京では季節はずれの雪が舞う中、桜の開花が発表されました。私たち信仰者、キリスト者も、いかなる状況、どのような環境にあっても、変わらない主なる神を見上げることを通して、その置かれた場所で、自分という世界で一つだけの花を咲かせましょう。そして、願わくば、豊かな実も実らせたいものです。「まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のように。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしていても栄える。」(詩篇 1:2～3)

カイザルのものはカイザルに、神のものは神に！

～キリスト者の社会的責任と靈的責任～

「・・・そこで、イエスは言われた。『それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。神のものは神に返しなさい。』」

(マタイの福音書 22 章 21 節)

パリサイ人たちは、主イエスを陥れるために、普段は歩調を合わせることのないヘロデ党の者たちと結託して納税問答を仕掛けました。ある意味、ユダヤにおいて、パリサイ人は右寄りの民族主義者であり、ヘロデ党は親ローマ的で、やや左寄りだと言えるでしょう。そんな水と油のような異質の存在同士が、共通の敵とも言うべき主に対して一つになったのです。ローマへの納税を否定すればヘロデ党の者たちが黙っていないし、納税を促せば今度はパリサイ人が黙っていないという、どちらに転んでも主イエスは陥れられるという状況が作り出されました。

ところが、主イエスは、デナリ貨幣にカイザル(=ローマ皇帝)の肖像が刻まれていることを確認しつつ、上掲の言葉を発したのです。「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。神のものは神に返しなさい。」。この言葉はどちらにも転ばない、ある意味、パリサイ人とヘロデ党の両者の口を封じる、極めて賢い応答だったのではないのでしょうか？社会的責任と靈的責任の両方を適宜、果たしなさい、というのです。

さらに言えば、この主の言葉は、ともすると社会的責任を軽視しかねない私たちに一石を投じているのではないのでしょうか？キリスト者は、靈的責任が阻害されない限り、「カイザルのものをカイザルに返す」という社会的な責任も果たすべきである、と。

ただ、社会的責任と靈的責任の両者が衝突する時があります。その時は、神の像(かたち)が刻まれている(創世記 1:27)とも言える私たちは、「人に従うより、神に従うべきです」(使徒 5:29)とのみことばに従い、靈的責任をこそ優先させたいと思います。

## 開かれた教会 ～仲良しクラブからの脱却～

「・・・器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで、目が手に向かって、『私はあなたを必要としない。』と言うことはできないし、頭が足に向かって、『私はあなたを必要としない。』と言うこともできません。それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。」（コリント人への手紙第一 12 章 20～22 節）

「・・・主がお入用なのです・・・」（マタイの福音書 21 章 3 節）

『使徒の働き』を見ますと、初代教会の様子として「・・・主も毎日救われる人々を仲間に加えて下さった。」（2 章 47 節）と記されておりま。教会がよい意味で“開かれている”がゆえに、新しい人々も入り易かったのではないのでしょうか？

前伝道者の小幡史朗兄が口癖のように言っていた言葉に「教会は仲良しクラブではない」というものがあります。当初、ピンと来なかったのですが、今、その言葉が痛いほど分かるような気がします。

教会の兄弟姉妹が愛にあふれて仲良くしていることは決して悪いことではありません。ただ、教会の中で、気の合う兄弟姉妹だけがグループを組んでしまい、そこから疎外感を感じてしまうような人々がいるとしましたら、それはまさに、上掲のみことばでパウロが指摘している状態、すなわち、教会内で、無言のうちに誰かに「私はあなたを必要としない」と言っているということなのではないのでしょうか？それでは、残念ながら「御茶の水キリスト（切り捨て）の教会」です。

むしろ、私たちは「御茶の水キリストの教会」として、教会に招かれている全ての人々に対して、こう言いたいと思います。「主がお入用なのです」と。…さあ、改めて、私たちは“仲良しクラブ”になっていないかどうか、各人で自己吟味致しましょう。

祈りとは？

「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。」

(コロサイ人への手紙4章2節)

キリスト者にとって欠かすことのできない“祈り”。そんな祈りとは何かについて、キリスト教界に伝わる、祈りに関する名言を頼りにご一緒に考えてみましょう。

「祈りはクリスチャンの呼吸である」(スポルジョン)・・・クリスチャンにとって、祈りは“呼吸”の如く、極めて自然な営みであると同時に、それをしないと死んでしまうという、霊的に生きるためには欠かすことのできない大切な営みです。

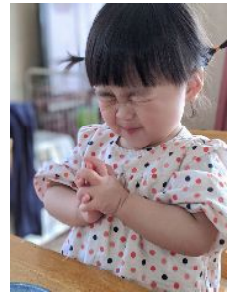
「祈りは神に近づく手段である」・・・おもしろいことに、「祈り」という漢字を分解すると、左側の部分(「ネ」)は「神」という漢字の左半分であり、右側の部分(「斤」)は「近」づくという漢字の右半分になります。それはさておき、やはり私たちが神に近づく手段は、祈りを抜きにしては考えられないでしょう。

「愚痴も神に向ければ祈りとなる」・・・祈りは神に対する私たちの率直な思いです。ゆえに、個人的な祈りにおいては、必要以上に言葉を飾る必要はなく、場合によっては、愚痴や訴えも神に向かう時にそれは祈りにさえなるのではないのでしょうか？主イエスが「アバ、父よ」と祈ったように、私たちも気兼ねなく祈りたいものです。

「祈りは、神を動かし、人をも動かす」・・・実はこれは私の祈りに対するイメージです。祈りというものは、決して気休めでも願望でもなく、全知全能なる神に対して私たちの率直な思いを訴えることであり、みこころに叶えば、そんな神が祈りに応えて動いて下さるのではないのでしょうか？と同時に、私たちキリスト者は「良い行いをするためにキリストにあって造られた」「神の作品」として、みこころに従って、祈りを行動へと移していくことが期待されているのではないのでしょうか？

## 祈りという恵み

「あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。  
その人は祈りなさい。」（ヤコブの手紙5章13節）



個人的なことになりますが、私には「珠理(じゅり)」ちゃんという一歳半になる姪がおります。まさに可愛い盛りで、会った時にはその一挙手一投足から目が離せません。皆で食事する時など、彼女もちゃんとお祈りに参加します。そして、そのしぐさがとても興味深いのです。誰かが「お祈りだよ」と言いますと、珠理ちゃんはまず手を組み、目をつむり、そして、必ずしかめっ面をします[⇒写真]。おそらく、大人たちがお祈りをする時に神妙な顔つきをするのをしっかり見ていたということではないでしょうか？

上掲のみことば、ヤコブの手紙5章13節にも「あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。」とあります。確かに、多くの場合、苦難と祈りは結び付きやすいものでしょう。しかしながら、私たちが愛して止まない全知全能なる神様に祈ることができるということは、大きな喜びであり、また、恵みでもあるのではないのでしょうか？私たちが祈る時、神様がみこころにかなって最善のうちに、事を為して下さるからです。

ある人は言いました。「私たちがやる時、私たちがやるだけだ。しかし、私たちが祈る時、神がやって下さる」。今週もまた、そんな祈りという恵みを存分に生かして歩んで参りましょう。

教会という恵み・・・ワンチーム！

「ですから、ちょうど、からだの一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。」 (コリント人への手紙第一 12 章 12 節)

日本には「寄らば大樹の陰」ということわざがあり、頼るならば大きな勢力に身を任せた方がいいという考え方があるかと思います。その一方で、アイルランドには「人は必ず、誰かの木陰で生きている」ということわざがあるそうです。つまり、人は一人だけで生きる存在ではなく、誰かのお世話になりつつ共に生きる存在であるということなのではないでしょうか？また、「木陰」という言葉に表現されていますように、ある人の陰の部分、すなわち、弱さが、別の人の慰めや励ましにもなっているのかもしれませんが。先週(2/9)の説教で取り上げました「弱さも賜物」というテーマにもつながるのではないのでしょうか？

ところで、今年のラグビーW杯で話題になりました、日本チームのスローガン「ONE TEAM(ワンチーム)」。教会もまた、キリストを中心にしたワンチームなのではないのでしょうか？上掲のみことば(コリント人への手紙第一 12 章 12 節)から始まる段落は、まさに、そのことを“一つのからだ”として説明しています。教会は一つの身体であり、ワンチームであり、その構成員である兄弟姉妹はキリストにあってそれぞれ有機的なつながりを持ち、互いに支え合う存在であるということです。

ちなみに、スウェーデンにはこんなことわざがあるそうです。「目の見えない人が足の動かせない人を背負う時、二人は一緒に前進する」。教会に連なる私たちは自分の賜物を用いて、互いに誰かの足となり、目となりたいものです。そうして、共に前進するのです。教会はそのためにこそ与えられている私たちへの大いなる恵みなのです！

## 弱さという賜物

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」  
(ローマ人への手紙 8 章 28 節)

似て非なる言葉に、「才能」と「賜物」があります。必ずしも、厳密な定義ではありませんが、私の感覚から言えば、あふれる「才能」は自分自身のために使うものであり、「賜物」は文字通り、神から賜ったものとして謙虚に受け止め、自分自身のためだけではなく、時に他者のためにも用いていくべきものなのではないでしょうか？願わくば、私たちは自分に与えられているものを、「才能」として発揮するだけでなく、「賜物」として分かち合っていきたいものです。

ところで、そんな「賜物」には、何かができるとか、何かが秀でているというような、少なくともプラスのイメージがあるのではないのでしょうか？しかしながら、時に、「すべてのことを働かせて益としてくださる」神は、私たちのマイナスをも「賜物」として用いて下さることがあるようです。

いわゆるくせっ毛の女の子がおりました。彼女はそれを自らコンプレックスに感じ、現に、それがいじめのきっかけとなることもあったようです。とても辛い思いをした彼女でしたが、やがて成長し、小学校の教師になりました。そんなある日、ふと気付くと、自分の周りに自然と、くせっ毛の子たちが集まってくることに気付いたそうです。そして、彼女はその時、自分の弱さも「賜物」であり、用いられるのだということに思い至ったそうです。

多くの人々は、私たちの信仰の武勇伝ではなく、むしろ、私たちが分かち合う弱さについて聴きたいのではないのでしょうか？思い切って、弱さを分かち合しましょう。



## “インマヌエル” という約束

「『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である)。」

「・・・見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

(マタイの福音書 1 章 23 節 / 28 章 20 節)

その誕生の際に“インマヌエル(神は私たちとともにおられる)”と呼ばれた主イエス・キリストは、実際の公生涯においても“インマヌエル”を体現し、また、地上を去る際にも、聖霊派遣を念頭に“インマヌエル(神は私たちとともにおられる)”を約束されました。はたして、私たちキリスト者は、そんな“インマヌエル”を実感して生きているのでしょうか？

仲睦まじい若い夫婦がおりました。ところが、ある日、妻のスーザンは不慮の事故に遭い、失明してしまったのです。夫は失意の中にあるスーザンにずっと寄り添い続けました。その甲斐あって、スーザンはやがて再び立ち上がり、夫に車で送迎をしてもらいいつも仕事に復帰するまでになったのです。しばらくして、夫はスーザンの自立を促すためにバスでの通勤を提案しました。当初、スーザンはとても不安がりましたが、毎日、夫がバスにも同行してくれたので、やがて、バス通勤にも慣れていきました。そんなある日、スーザンは夫に一人で通勤することを伝え、努力の結果、それが実現したのです。そうして、一人でバス通勤していたある日、バスの運転手がスーザンにそっとつぶやきました。「あなたはとても愛されているんですね」。不思議に思ったスーザンは運転手に聴き返しました。「どうしてそう思うの?」。すると運転手はこう言ったのです。「だって、あなたのご主人は毎日、通りの向こうからあなたが無事に会社に入るのを見届けているんだよ」。・・・主も私たちにそうして下さい！

## 神の恵みの見積もり違い

「主はいつくしみ深く、その恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」  
(詩篇 100 篇 5 節)

以下の文章をご存知でしょうか? 「つもり違い 10 ヶ条」と呼ばれる、大変興味深い文章です。紹介します。

高いつもりで低いのが教養	低いつもりで高いのが気位
深いつもりで浅いのが知識	浅いつもりで深いのが欲望
厚いつもりで薄いのが人情	薄いつもりで厚いのが面の皮
強いつもりで弱いのが根性	弱いつもりで強いのが自我
多いつもりで少ないのが分別	少いつもりで多いのが無駄

神の恵みも、私たちの思い込みや見積もりをはるかに超えて、とてつもなく大きなものなのではないでしょうか? 神の愛の温度は低いつもりが極めて高く、神のいつくしみは浅いつもりがかなり深く、神のふところは狭いつもりがとても広いのです。

今年の御茶の水キリストの教会のテーマ・ソングとも言うべき讃美歌 492 番の歌詞を改めて味わいましょう。

神の恵みはいと高し。

仰ぐ高嶺の白雪に、朝日匂えるヘルモンの、山にも勝り高さかな。

神の恵みはいと深し。

底いも知れぬ海原に、夕日輝くガリラヤの、海にも勝り深さかな。

神の恵みはいと広し。

果てしもあらぬ真砂地に、月澄み渡るアラビヤの、原にも勝り広さかな。

アーメン

いいね！がなくても大丈夫！～facebook 症候群からの脱却～

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。」

(イザヤ書 43 章 4 節)

私たちは、しばしば、誰かから認められたい、よく言われたいという思いに駆られます。例えば、いわゆる facebook で誰かからの「いいね！」がもらえないと、不安で不安で仕方なくなってしまうのです。メールやラインへの好意的な返信、ツイッターへのリプライがないと、自分が評価されていない、認められていないと思いつ込んでしまうのです。人呼んで、「いいね！」  
欠乏 facebook 症候群。

しかしながら、聖書の神様は、そんな私やあなたに、優しくこう語りかけて下さいます。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。」。

神様は、私たち一人一人をオンリー・ワンのかけがえのない存在として、価値ありと認めて下さっているのです。誰が何と言おうと、あなたに対して、私に対して、神はこう言っておられるのです。・・・あなたは高価で尊いよ、ありのままがいいんだよ、そのままのあなたが「いいね！」と。

あの嫌われ者のザアカイも、もしかしたら他者(ひと)から認められたくて、不正な取り立てまでして金儲けをしていたのではないのでしょうか？しかし、主イエスはそんな彼に、そのままのあなたで「いいね！」という思いを込めて、「義人」を意味する“ザアカイ”という名前呼びかけたのです。ゆえに、彼は奪う人から与える人へ大きく変わりました。そう、人は、変わらなくていいと言われる時に変わるものなのです！

主にあって・・・大逆転は起こりうる！

「このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

(マタイの福音書 20 章 16 節)

上掲のみことばは、先週(1/5)の説教でも触れました「ぶどう園の労務者のたとえ」(マタイの福音書 20 章 1～16 節)を語った際の主イエスの最後の言葉、締めくくりの言葉です。つまり、恵みの世界では、主において「あとの者が先にな」というような逆転が起こりうる、ということです。人呼んで「聖なる逆転」(Divine Reversal)。

最近、ある姉妹がこんな面白い逆転式広告があることを教えて下さいました。まずは素直に最初から読んでみて下さい。

「大逆転は、起こりうる。わたしは、その言葉を信じない。どうせ奇跡なんて起こらない。それでも人々は無責任に言うだろう。小さな者でも大きな相手に立ち向かえ。誰とも違う発想や工夫を駆使して闘え。今こそ自分を貫くときだ。しかし、そんな考え方は馬鹿げている。勝ち目のない勝負はあきらめるのが賢明だ。わたしはただ、為す術もなく押し込まれる。土俵際、もはや絶体絶命。」

ところが、これを逆転させて、最後から読んでみて下さい。すると、こうなります。

「土俵際、もはや絶体絶命。わたしはただ、為す術もなく押し込まれる。勝ち目のない勝負はあきらめるのが賢明だ。しかし、そんな考え方は馬鹿げている。今こそ自分を貫くときだ。誰とも違う発想や工夫を駆使して闘え。小さな者でも大きな相手に立ち向かえ。それでも人々は無責任に言うだろう。どうせ奇跡なんて起こらない。わたしは、その言葉を信じない。大逆転は、起こりうる。」

そう、恵みの世界では、主において、大逆転は起こりうるのです。ハレルヤ！

## 恵みに生きる ～その受容と応答～

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」  
(エペソ人への手紙2章8～10節)

まず、恵みありき！・・・言わば、キリスト教は“恵み”の宗教です。それは、すなわち、私たちが救われ得るのは、決して私たちが何かをしたからなのではなく、主なる神様が私たちのために救いのみわざを成し遂げて下さったからであり、そのことを私たちが信じるからに他ならない、という意味なのです。

使徒パウロはそのことを上掲のみことばで明確に語っています。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。」。ゆえに、キリスト教は、「為せばなる、為さねばならぬ何事も」というような意味での“なす”宗教ではなく、まさに、救いのために為すべきことは神様が全て為し遂げて下さったという意味での“なされた”宗教なのです。

私たちには、まず、そんな救いの恵みをしっかりと受け留めることが求められているのです(恵みの受容)。そして、パウロが続けて「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」とっておりますように、その恵みに応えることが期待されているのです(恵みのへの応答)。